

# 母子相互作用の発達心理学的研究

小 嶋 謙四郎 (早稲田大学文学部)  
大 藪 泰 (長野大学)  
田 口 良 雄 (上田市立産院)  
繁 田 進 (横浜国立大学)  
依 田 明 (横浜国立大学)

## はじめに

われわれの研究課題は、1.プレアタッチメント期とされる生後3ヶ月の母子相互作用、とくに、出産直後の乳児と母親のシグナル—応答システムの形成の必要条件、2.母子のアタッチメント関係の評定法の確立と、アタッチメント関係の比較、3.母子の分離・自立のしくみ、をあきらかにすること、さらに、4.母子相互作用仮説にもとづく乳幼児発達指導の基準を作成することにある。

3年間の研究成果の要約は、それぞれ分担執筆したので、それにゆずりたい。

この研究をとおして、われわれは、アタッチメント関係の概念が、子どものパーソナリティの発達と、精神的健康の理解に基本的な役割をもつことを、あらためて認識することができた。

今回は、アタッチメント関係の研成・確立期を中心に、テーマをしぼったが、今後は、母子相互作用の新しい研究法の開発をおこない、幼児期から思春期まで、研究対象を拡大し、思春期の問題行動の発達臨床心理学的接近を試みたい。

## 1. プレアタッチメント期の母子相互作用

大 藪 泰 (長野大学)  
田 口 良 雄 (上田市立産院)

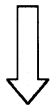
### 研究目的

新生児は啼泣、覚醒、睡眠に大別される行動状態 (behavioral state) を生得的に備えて誕生してくる。これらの行動状態の出現は一定のサイクルに根ざしており、そのサイクルは胎児期には母親との生理的な共生関係によって保持されるが、出生とともに外界との交渉過程、特に母子相互作用のなかであらたに再構成されることになる。すなわち、新生児の行動状態のサイクルは、母親にそのサイクルと同調する養育行動を要請する一方で、自らのサイクルも母親の養育行動によって影響されながら再構成されていくのである。そこには生物—社会的 (bio-social) な存在としての人間がみせる発達の最も初期の姿が現われてい

るとみなせよう。

こうした観点から、我々は早期産児や満期産新生児を対象に、その行動状態の発達の変化を検討した (大藪ら1981<sup>1)</sup>, 1982<sup>2)</sup>)。その結果、啼泣と覚醒との連続した出現が日齢の経過につれて増加する現象を見出し、早期新生児は啼泣によって母親を呼びよせ、母親との接近維持機能を有する覚醒状態で母親と出会うことができる行動体制をすでに獲得していることが明らかにされた。

最終報告の本研究では、Emde, R.N.ら (1975)<sup>3)</sup> の指摘によって知られる分娩直後の新生児が示す高喚起 (high arousal) 状態を取り上げ、その特異な様相が検討された。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



はじめに

われわれの研究課題は、1. プレアタッチメント期とされる生後3ヶ月の母子相互作用、とくに、出産直後の乳児と母親のシグナル-応答システムの形成の必要条件、2. 母子のアタッチメント関係の評定法の確立と、アタッチメント関係の比較、3. 母子の分離・自立のしくみ、をあきらかにすること、さらに、4. 母子相互作用仮説にもとづく乳幼児発達指導の基準を作成することにある。

3年間の研究成果の要約は、それぞれ分担執筆したので、それにゆずりたい。

この研究をとおして、われわれは、アタッチメント関係の概念が、子どものパーソナリティの発達と、精神的健康の理解に基本的な役割をもつことを、あらためて認識することができた。

今回は、アタッチメント関係の研成・確立期を中心に、テーマをしぼったが、今後は、母子相互作用の新しい研究法の開発をおこない、幼児期から思春期まで、研究対象を拡大し、思春期の問題行動の発達臨床心理学的接近を試みたい。